

「旅育」の可能性に関する一考察  
—小学校における観光教育の充実化への有効性について—

人間教育専攻

現代教育課題総合コース

清水 翔平

指導教員 太田 直也

### はじめに—問題の所在

近年、国際観光者到達数が 10 億人を超え、観光は重要な産業として位置付けられるようになった。日本を訪れる外国人観光客も 1000 万人を超えるようになり、政府はインバウンド政策の強化を掲げた。日本観光振興協会は「観光立国実現の提言」において、「国民意識の向上」の中で「観光と接触する機会の増加」を提言し、小中学校などの学校教育において「旅育」の導入を早期的な観光教育の実現を図っている。「旅育」は観光を問題解決的・体験的に学ぶことにより、子どもの成長に関わることができる。しかし、「旅育」は現段階において、日本観光振興協会が出張授業として講義を行うに留まっている。

本論文は、小学校における「旅育」の導入とりわけ、総合的な学習の時間への導入に関する可能性について考察するものである。

### 第1章 現代の観光について

産業革命により、蒸気機関が発明され、鉄道が誕生したことにより、交通機関が飛躍的に向上した。それに伴い移動の短縮化、大量化、広域化によって、マス・ツーリズムが普及した。日本も、その影響を受け、東海道新幹線の開通や航空機、自動車、船などの新たな交通機関の誕生のほか、ホテルなどの宿泊施設が増加し、観光が国民大衆のものとなった。また、東京オリンピックの開催や万博博覧会などにより、海

外旅行が普及するようになり、国際観光の時代の幕開けとなった。

しかし、国際情勢の悪化や社会経済の変容により、若者の消費行動に影響を及ぼしたとされているが、近年では「若者の海外旅行離れ」が危惧されている。また、観光開発による生活環境の向上や自然環境の破壊に関する問題などが深刻化している。エコツーリズムの普及や自然破壊の保全に配慮した観光開発が行われるためには、観光教育を充実化を図り、持続可能な観光を実現する必要がある。

### 第2章 日本における観光教育の現状

観光が産業として重要な位置づけにあることから、観光人材を育成することをねらいとして、大学において専門的な知識や技能の習得が図られている。観光が学術的な視点で捉えられる理由には、ビジネスとしての観光、地域文化と観光、文化現象としての観光の三つがある。これらについて総合的に教育することで観光の全体像をとらえることになる。また、観光には「観光のプロ(ホスト)」と「観光客のプロ(ゲスト)」の二つの視点について教育されることにより、観光の質の向上と観光地の価値水準が高められることが期待できる。

しかし、観光教育で、学生の観光実践への参加意欲の低さが懸念されている。観光学習においては、学習で得た知識(学習知)を体験で得る

知識(体験知)へと変換することが求められる。これを前提とするならば、観光学習には体験活動が必要であり、観光教育の課題を克服するためには、学習者である学生の意識を変える必要がある。その問題は観光を通じた体験活動を行うことにより解決でき、観光に対して興味関心を向けさせることができ、観光教育の充実化が図られると考える。本論ではさらなる充実化のため、「旅育」を学校教育に導入する可能性を探る。

### 第3章 「旅育」による小学校の観光教育の充実化への有効性

小学校への「旅育」の導入は、総合的な学習の時間の活用が有効であると考え。「旅育」とは、「旅は人間性の成長を促すとする考え方で、旅によって得られる知識や興味・価値観の広がり、共感力を人の成長に役立てようとするもの」である。また、環境教育、キャリア教育、国際理解教育などの多様な側面をもち、学習意欲を喚起させる効果が期待できる。観光が多様なものとのつながりがあるものであることから、「旅育」は総合的な学習の時間の問題解決的・体験的な学習として行われることが適当であると考え。

本章では二つの小学校の総合的な学習の時間の事例を挙げ、「旅育」の可能性について述べた。北海道小樽市色内小学校では、第5、6学年の子どもが小樽市の観光ガイドとして体験活動を行われたものである。この活動において、子どもが観光客に向けて観光資源について解説することを通じて、コミュニケーション能力が育成されていることが分かった。また、子どもが「おもてなしの心」について考えることを通じて、道徳心が育つことも考えられる。

山口県下関市角島小学校では、第4学年の子

どもが観光客向けの観光PRを作成するという活動を行った。観光客や観光の仕事をする人へのインタビュー活動を通して、主体性や積極性、観光に関わる仕事の存在を認識することによるキャリア教育を果たしていることが分かった。

両者の体験活動はともに観光地側のホストとしての立場になって、「旅育」が行われている。両者ともに地元地域を観光地として見ることにより、地域の新たな一面を見ることになり、地域に愛着を持つ態度を形成することにつながっていると言える。観光を通じた体験活動は社会科や外国語活動で習得した知識や技能を活用して問題解決的に課題に取り組みされており、高い教育効果をあげていることが明らかとなった。つまり、「旅育」は観光を通じて子どもの成長に寄与しているものであるため、総合的な学習の時間における体験活動として成立していると言える。

おわりに

「旅育」が総合的な学習の時間の問題解決的・体験的な学習として有効であり、子どもの主体性や協調性、コミュニケーション能力、道徳心の育成に寄与していることがわかった。観光学習は宍戸の述べるように「学習知から体験知への変換」が重要であり、社会科や外国語活動で得た知識や技能を活用する場として「旅育」は行われなければならないと考える。

「旅育」は現在、一般社会においては必ずしもあまり浸透しておらず、観光商品としてのキャッチフレーズとして扱われることが多い。しかし、「旅育」の教育的意義と効果は無視できない。特に、総合的な学習の時間への「旅育」の導入は、子どもの知識や技能を活用する体験活動の場を提供することができると思う。